第四節　豐竹越前少掾と豐竹座

一　豐竹越前少掾の略傳

江戸時代の新國民樂の大成者初代竹本義太夫の後は、初代政太夫事竹本播磨少掾によつて繼がれ、竹本座は彼を中心として、座本竹田出雲の統率の下に、その他の名手がよく師の衣鉢を傳へて、人形劇はいよいよ隆盛に赴き、義太夫節はますます世に流布するやうになり、茲に人形劇全盛時代を現出するのである。ところが一方に於て初代義太夫の偉業を助け、また彼の事業を繼承して人形劇隆盛の機運を作る上に於て、竹本座の人々に勝るとも劣らない程の功績を殘した樂壇の偉才があつた。それは卽ち義太夫節の豐竹派の始祖で、豐竹座の創立者たる豐竹越前少掾その人であつた。越前少掾は天和元年大阪南船場生れで(『竹豐故事』、なほ『淨瑠璃譜』には「堂島豐後の家敷中衆〔中仕〕で河內屋勘右衞門といふ」とある)、夙に義太夫について淨瑠璃を學んだが、彼は天稟の樂才があつたのみでなく、義太夫門下としては珍らしく覇氣に富んだ人物で

あつたらしい。

元來、義太夫の門下としては竹本頼母がその筆頭であるが、彼は溫厚な性質であつて、師の在世の間はワキ語りとしてその分に甘んじ、師の歿後はよくその門弟の中心となつて二世義太夫を助けたと共に、一方遊里に於て持囃されて一生を終つた人物であつたやうである。『當世乙女織』（寶永二年成　錦文流作）卷四に、

こゝに竹本頼母と申す淨瑠璃太夫、則ち此里（大阪の遊里）に住居いたし候へば、たいこ持と申すにはあらねど、あなたこなたに御座敷を相勤め候。淨瑠璃は年來筑後が膝を離れず、床を勤むる者にて候へば、ふしは先生がくさめまでをのがさず、聲に愛有つて淨瑠璃うつくしう語りなし、どこやら筑後よりうまい所あり、うたよく諷ひ、三味線仕り、ぞつこん心底綺麗に生れつき、今の世の座敷持ち、申さう處はなけれども、酒のならぬが殘念、しかしながら是は淨瑠璃と食とでおして參り申すべし。

と見えてゐる。

その他、喜内・喜代太夫・内匠太夫を初め澤山の門弟があつたのであるが、いづれも義太夫あつての彼等であつた。殊に後には義太夫節中興の名人とまで稱へられるやうになつた和歌竹政太夫（二世義太夫）でさへ、初めは、見込がないといつて見放された程であつて、天馬空を行

くが如き天才風の義太夫の藝が餘り光り過ぎた爲か、その門弟は皆彼の在世時代にはその光を失つて居た。

然るにこの中に在つて、義太夫の門弟として比較的後輩で、師匠よりは三十歳も年下であつた竹本采女だけは、既に二十歳前後から獨立を企てて居たもののやうであつた。此の間の消息については諸書の所傳は多少相違して居るが、今、最も信を措けると思はれる西澤一風の『今昔操年代記』を主にして、その他の書物を參酌し、その大體の經歴を述べて見よう。彼は元祿十五年（廿二歳）の春の末に、竹本座一連が伊勢へ旅興行に出かけたその跡芝居に於て、『傾城懐子』といふ新淨瑠璃を語つた。併しそれは成功しなかつた。この年月については、『操年代記』はこれを年十八歳頃とし、明和板『外題年鑑』は元祿十二年八月上場としてあるが、今は『淨瑠璃譜』の說に從ふことにする。かくの如く取立てていふ程の事もなくて其年も暮れたが、翌十六年に道具屋吉左衞門・永島金太夫、その他の同志と共に、東立慶芝居（伊藤出羽掾の芝居なるべし）に於て素淨瑠璃の出語りをしたが、これもはかばかしくなく、程なく中止して、旅かせぎに出かけた。その歸りに堺の南の端で興行中、土地の材木町糸商菱屋の娘が手代の久兵衞と駈落して萬代（もず）の畑中の井戸で心中したので、これを一夜漬の一段淨瑠璃に仕組んで、『心中泪

の玉井』と外題を掲げて興行したところが大いに當つた。そこで大阪に歸つて、長門九郎兵衛と相座本で道頓堀の舞の芝居に櫓をあげ、豐竹若太夫と改名して『さかひみやげ心中涙の玉井』を出して大喝采を博した。その餘勢を以て翌年春まで出し物を二三取換へて興行し、それから備中へ下つた。ところがその間に豐竹座の櫓は退轉して了つた。

泉州築能（つくの）といふ人舞の芝居を求め、櫓は濱の竹田に譲り、芝居をつぶして貸家となしぬ。

と『操年代記』は記してゐる。

旅興行から歸つた若太夫は、竹本座の新座本竹田出雲の切なる勸告に應じて竹本座へスケに出勤して『用明天皇職人鑑』の二段目佐渡ヶ島の松浦兵藤太館の場を語つた。これは寶永二年顔見世興行であつて、若太夫の廿五歳の時である。この時の彼の語り口は師匠の筑後掾に酷似して、見物は聞き紛ふ程であつたといふ。その翌年も竹本座に勤めてゐた事は、『本領曾我』（寶永三年二月）の番附（註一）によつて明かである。これによつて見れば、若太夫は當時既に義太夫門下の儕輩を凌いで頭角を表して居た事は明かであつたが、また一方に於ては、その藝風は師匠と大差があり、それが爲に分離または破門に至つたものでなかつたかと推測し得るのである。ところがこの年の暮に若太夫は再び竹本座を去つて豐竹座を再興し、それから紀海音を作者に聘し、玆

に始めて操座として竹本座に對立する事となつた。その後も苦心經營して次第に人氣を博し、筑後掾歿後は次第に名聲が揚り、享保三年春受領して豐竹上野少掾藤原重勝と名乗り、享保九年十一月道頓堀嵐座の敷地（嵐勘四郎の芝居であらう）を買つて豐竹座を新築し、自ら太夫元にして座本を兼ねた。ここに於て西の竹本座と東西相對して道頓堀に操の櫓が立ち、大阪の人氣を集めて、東贔屓、西贔屓が相爭ふやうになり、上野少掾の人氣はいよいよ加はるに至つた。越えて享保十六年九月再び受領して越前少掾と稱へた。この頃の彼の門弟は名取の太夫九十餘人、素人五十餘人といふ中々の勢力であつた（享保十六年、『音曲常盤御』）。

ところが六十五歳の延享二年十一月に『北條時賴記』の雪の段の出語りを一世一代として舞臺を退いて、高弟内匠太夫が豐竹上野少掾の名跡を繼いだ。越前少掾はさらに翌三年秋京都に於て、一世一代として『久米仙人吉野櫻』を演じ、のち寛延元年十一月に堺で一世一代『東鑑御狩卷』、『惡源太平治合戰』を演じ、これで全然舞臺から引退し、その後は豐竹座の座本として專ら座の經營方面に力を致すと共に、またその前後、梁塵軒の號を以て時々淨瑠璃を作つて（註二）、その座に於て之を演ぜしめた事もあつたが、晩年は靜かに世を送つて明和元年九月十三日歿した。享年は八十四である。

門弟としては豐竹新太夫・駒太夫・内匠太夫（上野少掾）・島太夫・駿河太夫その他澤山あつた。その中で美聲として知られたのは駒太夫であつた。新太夫は享保十九年冬江戸に下り、豐竹肥前掾を受領して、江戸に肥前座を創立し、この地に義太夫劇を盛ならしめ、義太夫節を流行させる上に少からず貢献した人物である。而して越前少掾も亦寛保元年には門弟駒太夫・三絃竹澤藤四郎・人形遣若竹東九郎・作者並木宗輔等を伴つて肥前座に下り大好評を博して、大いに義太夫節の爲に氣勢をあげた。この點から見れば、江戸の義太夫節が盛んになつたについても越前少掾の直接間接の力が頗る與つて居るといつてよいと思ふ。

越前少掾肖像

斯樣な次第で越前少掾はその藝歴は約五十年の長きに亘り、その間に操にかけて語つた淨瑠璃は、『外題年鑑』によつて見れば約百五十段の多きに及んで、數だけからいへば師匠の義太夫よりは少し多い位であるが、若太夫時代の作の過半は古淨瑠璃の借用で、これが二十段以上もある。自分

が今日まで親しく見た彼の正本を本位にして、その淨瑠璃を計算して見れば、

若太夫時代の作が二十一篇(註三)

上野少掾時代のものが四十九篇

越前少掾になつてからが四十一篇

で百十篇である。この外未見のもので新作と思はれるものも十數篇はあるが、それを加へても矢張り數だけでも義太夫には及ばない。況んやその內容を比較するに及んでは、到底日を同じうして談ずべきではない。所詮、初代義太夫は同流の創業大成の偉業をなした義太夫界空前絕後の人傑で、之に對して越前少掾は守成流布の功があつたと評すべきである。又その藝風に於ては、本來、左まで大差はなかつたことは明かで、豐竹・竹本と對立してからでも、東西兩座の太夫中には西を去つて東に入り、東を出でて西に勸めるといふ事は常に行はれて居たのでも明かで(註四)、ただ義太夫節そのものが次第に朗唱の部分より謠ふ部分が多く、節廻しが巧緻になると共に、一方に於てまた非常に劇的になつて來たやうであるが、これは一般の大勢がさうで、之を馴致する上に於て二世義太夫と越前少掾とがその中心であつたらしいが、これは次期の全盛時代の問題である。

（註一）　虱本の表紙貼紙に左の如く見えてゐる。

豐竹若太夫
竹本頼母　　作者　近松門左衛門
竹本筑後掾　　座本　竹田出雲
人形　辰松八郎兵衛

（註二）　梁塵軒作の淨瑠璃。

酒呑童子出生記　　延享三年五月
萬戸將軍唐日記　　延享四年三月（淺田一鳥、但見彌四郎と合作）
華和讃新羅源氏　　寛延二年六月

（註三）　傾城懐子（未見）、心中涙の玉井、金屋金五郎淨名額、金屋金五郎後日雛形、東岸居士、小野小町都年玉、信田森女占、なんば橋心中、三井寺開帳、男色賀茂侍、梅田心中、佛法舍利都、椀久末松山、山枡太夫戀慕湊、平安城細石、丸腰連理松、仁德天皇萬年車、傾城三度笠、鬼鹿毛無佐志鐙、曾我姿富士、傾城思升屋。

（註四）　この顯著な例は、二世豐竹上野少掾が、寛延元年八月竹本座に入つて『忠臣藏』を語り、後、竹本座を出た伊太夫が豐竹座に入つて此太夫となり、これから豐竹筑前少掾となる如き即ちこれである。

二　豐竹座の起原

豐竹越前少掾の約五十年に亙る長い藝歴を辿りつつ、之を人形劇の變遷に引當てて觀察すれ

ば、その前半は人形劇大成時代に活動し、後半は人形劇の全盛時代の古老として重きをなした人であるといつてよい。自然、本章の主題として取扱ふべきはその前半であるといふ事になる。而して彼の前半生の事業は實に豐竹座の建設といふ事であつたといつてよい。ところで豐竹座の建設は初代義太夫が竹本座を創立した程の史的意義はないが、それでも義太夫劇の人氣を盛んならしめ、又その流派自身競爭的になつて內容・外形共に改善を加へられ、枝を張り葉を茂らす上に於て非常に效果があつたのであるから、人形劇史上に於ては決して輕視してはならぬ。然るに今日迄はこの豐竹座建設に關しては信すべき確說がなく、誤謬をそのまま踏襲して來た。而して今日まで行はれた古說は明和板の『外題年鑑』の元祿十二年創立說であるが、これは前に越前少掾の傳記の條に言つた通り信じ難く、彼が竹本座初舞臺の年を誤り傳へたものと思ふ。『傾城懷子』を語つた元祿十五年を起點とする說もあるが、この時は未だ竹本采女と名乘つて、筑後掾の座で語つたのであるから、嚴格にいへば贊成は出來ない。どうしても彼が堺から戻つて豐竹若太夫と名乘つて、長門九郎兵衞と相座本で『心中淚の玉井』を興行した時を豐竹の創立と見なければならぬ。ところがこの『淚の玉井』は、元祿十五年五月の興行といはれて（外題年鑑）、從來この說が行はれて居た。併し之は誤であつて、元祿十六年の竹本座の『曾根崎心

中』興行以後たることは『操年代記』の記事(註一)によつて暗示されて居るのみでなく、『涙の玉井』の作の內容上から見ても之を肯定せざるを得ないのである。その要點を擧げて見れば、先づ脚色の上に於て、發端のおはつ住吉參り道行は、『曾根崎心中』の發端のおはつの觀音巡りの翻案で、文句にも處々その燒直しと思はれるものさへ見える。續いて住吉の鳥居前の水茶屋でおはつが久兵衞に出會ふ場面は、『曾根崎心中』の生玉社頭の出茶屋の出會の場と全然同工異曲である。加之、おはつの詞に「そちの內でも表でも曾根崎の心中は、南へ移つて來さうな事」とあるのなどに因つて考へて見れば、この作が『曾根崎心中』の後で、これに倣つて作られたことは明白である。而して文中に盆の季節を當込んだ文句が處々にあるのによつて見れば、盆興行であつたものと察せられる。故に豐竹座の創立は元祿十六年七月と推斷すべきである。而して『涙の玉井』の次には『金屋金五郎浮名額』を演じ、この二興行は頗る大當りで、大分人氣を呼んだ模樣は『操年代記』の記事で想像するに難くない(註二)。自然、『淨瑠璃譜』が『浮名額』を元祿十五年五月興行としてあるのも錯誤であるといふことになる。併し乍ら折角の彼の旗上げも、その儘永續する事が出來ずに、翌年春『東岸居士』興行後、備中へ下つて居る間にその櫓は退轉し、その座は貸家とされて了つた。けれども彼は之に屈せずに寶永三年末に河內屋加兵衞の

勸めに從ひ、當時お山人形遣ひの名手と聞えた辰松八郎兵衞を竹本座から拔いて相座本とし、作者には當時大阪の文壇に於て優越の地位にあつた紀海音を聘して、花々しく篠の丸の櫓幕を上げた。(註三) 之を義太夫が竹庄と結んで竹本座を起したのに比べて見るに、加兵衞粹人ではあつたが興行界の才物竹庄ではなく、若太夫は義太夫でなく、また海音は淨瑠璃作者としては近松の敵ではなかつた上に、時期も異り、場所の關係もあり、かたがた豐竹座の旗上げは、義太夫が竹本座を創立したやうに順調には行かなかつた。卽ち、旗上げ當座に於ける豐竹座は、實は竹本座の敵ではなかつた。その事情は右に擧げた數々であつたらうが、主なる原因はまさに作品の優劣ではなかつたか。『淨瑠璃譜』が、

新淨瑠璃數々差出すといへども、竹本芝居作意宜敷、淨瑠璃外題も今に殘りし正本ありといふは、皆近松門左衞門が作意なり、豐竹は新物多しといへども、外題なじみなく、本なども見當らず

と言つて居るのでその大體は想像される。更にこの記事を裏書すべく、正本について少し檢べて見るに、若太夫が豐竹座を起した元祿十六年から上野少掾を受領する享保三年迄の十六年間に語つた淨瑠璃は、『外題年鑑』には九十段を擧げて居るが(明和板。寶曆板は約七十段)、之はその儘信ずることは出來ない。現存の正本を本位にして研究して見れば、この中には上野少掾時代

の正本が少からず紛れ込んで居る。即ち、

末廣十二段・新百人一首・新板兵庫築島・今樣殺生石・坂上田村麿・富仁親王嵯峨錦・賴光新跡目論・本朝五翠殿・八幡太郎東初梅・傾城國性爺・記錄曾我

の如き比較的名高い作は、皆現存の正本は上野少掾時代の正本のみで、未だ若太夫時代の正本に接しない。加之、その內容・脚色・筆致などから察しても享保に入つての作としか思はれないものである。又その外、井上播磨掾・宇治加賀掾または義太夫の語物を借用したのも相當にあるので、眞に若太夫時代の新作で、また新作曲に成るのは極めて少くて、私の見た物は前にいつたやうに實に二十篇位に止つて居る。而もこれを同年代の竹本座の作品に比較して見れば、實はよくこんな作で見物があつたものだと思はれる程である。この點は後に紀海音の條に少し內容上の解說を加へる積りである。兎に角、よい作品がないに拘らず座を持ちこたへた若太夫は相應に藝の力があり、また經營の才があつたと解すべきであらう。實際、劇場經營はいつの世でも困難であるが、殊に歌舞伎や、からくりの興行も隆盛であつた當時には、操は尙更で、竹本座でさへ「三八の十八であはぬ算盤」であつたのを、竹田出雲といふ興行界の偉ら者が座本になつて、義太夫と近松とを兩翼として漸く基礎を堅めたのであつた。元祿時代の劇場經營

難は決して操座だけでなく、歌舞伎の方でもさうであつたことは、『岩井半四郎最後物語』（元祿十二年成）を見ると、岩井座の座本で人氣役者であつた岩井半四郎さへ死ぬ時は二千兩の借財があつたといひ、又、各座の座本が頻繁に變るのを見ても、ほぼ推測出來るではないか。それ故、豐竹座がその創立當時經營困難であつたのは當然で、これが兎に角命脈を保つたのが寧ろ不思議といふべきで、これは大阪に於ける義太夫節の民衆化が頗るよく行はれて、後援者の多かつたのを知ることが出來ると思ふ。事實上に於て豐竹座が次第に人氣を集めるやうになり、その存立を確認されるやうになつたのは、筑後掾が世を去り、若太夫が上野少掾を受領するやうになつてからであつた。併しそれでも「さのみ當りといふ事なし、なれども根づよく一座を持ちかため、折にふれ時によつて和歌山、奈良、堺へもまはり、先々の評判よく」（操年代記）、この間に竹本座の方では近松が世を去り、反對に豐竹座では『賴政追善芝』（享保九年二月）で空前の大當りをとつた。同年二月の大火には竹本座と共に燒失したが、曾根崎新地で引續いて之を興行し、傍ら、嵐座の敷地を買つてここに新劇場を建てる計畫を立て、同年顏見世には落成して花々しく新築披露の興行をすることが出來た。これが實に豐竹上野少掾が初めて自ら座本となつた道頓堀東の操芝居であつた。竹本座を大西といふに對して豐竹座を東といつて東西對立したのはこの時

が初めである。それから享保十一年の『北條時賴記』で大當りをとつて、ここに初めて豐竹座の基礎が確定して明和初年迄、大阪劇界の名物となつたのである。それ故、實は大阪名物の隨一といはれた操芝居の東の櫓―豐竹座の出來上つたのは、享保九年であるといつても差支ないので、在來の說の如く元祿の末年から竹本座と對立して操芝居の覇を爭つたといふ風に考へるのは無稽も亦甚しいといはねばならぬのである。

（註一）『今昔操年代記』上卷。

長門九郎兵衞と語らひ、相座本にて舞の芝居に櫓幕、豐竹若太夫と改め花やかなる看板さかひみやげ心中泪の玉井と出しける、春頃筑後がたには曾根崎心中、兩家同じやうなる仕組、云々。

（註二）『今昔操年代記』上卷。（註一）の文に引續き左の如くある。

玉の井の奥、久兵衞おち道行の內に、さのみじみ〳〵なげかずとあゆましやれ、さきには鬼はないものと、初冠より町中に口眞似させ、次のかはり金五郎浮名額、是も一段淨るりにて茶屋名よせの道行に、まことに小さんと我中はあのほり詰の二つ井戸、どちらを見ても深ければと、浪花のわかい衆によろこばせ、そね崎道行同前に、此稽古本京大坂の淨るり本屋、門をならべ板行してひろむ、あたまから見物にのみこませしは、太夫になるべき五音の調子聞人かんじけるなり云々。

つまり作が世話物で面白かつたのと、若太夫の美音とが呼物であつたものと思はれる。

（註三）海音と辰松を呼物にしたと見えて、正本の卷頭の題字の下に、

作　者　紀　海　音

お山人形　辰松八郎兵衛

と並べ掲げたものがある。即ち、『椀久末松山』『鬼鹿毛無佐志鐙』『なんば橋心中』『西行法師墨染櫻』等がそれである。